

大会長挨拶

日本放射線影響学会第53回大会を平成22年10月20日(水)から22日(金)までの3日間、京都駅近くの京都府民総合交流プラザ京都テルサにおいて開催させて頂くことになりました。関西での開催は平成15年の第46回大会(内海博司先生)以来7年ぶりの開催です。しかし、創設34年目を迎える京都大学放射線生物研究センターでは初めての開催となります。このため、センターの教職員、研究員、学生が一丸となって準備を進めてきました。

日本放射線影響学会は放射線の人体と環境に与える影響およびこれに関する諸科学への寄与を目的として設立されました。前者に関連して、地球温暖化問題はもはや避けて通れない人類共通の最重要課題となり、原子力発電が代替エネルギーとして再び脚光を浴び始めています。一方、高齢化社会を迎えて、患者の Quality of life に優れた療法として癌の放射線治療が注目されています。また、後者については、放射線応答が発がんバリアーモデルや iPS 細胞化など現代生物学の最先端と関わる事が明らかになってきました。このような状況にあって、日本全国より多数の会員が一堂に会して研究成果を発表し論議をつくることは大きな意義があると確信しております。

本大会の特徴として、特別企画「幹細胞と再生医療」、また、サテライトシンポジウムとして放射線生物研究センターとの共催による“Centrosome in DNA damage response and diseases”、同じく(財)体質研究会等との共催による市民公開講座「宇宙と生命の歩みと放射線」を企画しました。また、10年ごとの科学研究費補助金「系・分野・分科・細目表」の見直しが迫っておりますのでランチオンセミナー「科学研究費の最近の動向」も計画しました。学術発表の方針は基本的には従来通りであります。若い研究者が中心になってプログラムを編成してくれました。また、国際化への対応として英語発表のセッションも試みました。

最後になりましたが、学会長はじめ多くの学会関係者の方々、そして本大会開催の趣旨にご賛同頂き格別のご支援を賜りました各位に心より厚くお礼申し上げます。

平成22年10月吉日

日本放射線影響学会第53回大会
大会長 小松 賢志